

鏡からみた沖ノ島祭祀の展開

岩本 崇

はじめに

玄界灘に浮かぶ絶海の孤島である沖ノ島では、じつに多数の銅鏡が確認されている。それらの主たるものは発掘調査によって出土したが、ほかにも沖ノ島からの出土が伝えられる鏡や出土の推定される鏡が少なからず存在する⁽¹⁾。発掘調査による出土資料を中心として、沖ノ島での出土をほぼ確実視できる鏡は七六面にのぼる。そのうち漢鏡の可能性のある例が一面⁽²⁾、三国西晋鏡一二面（うち三角縁神獸鏡九面）、同型鏡群二面、倭鏡四六面、隋唐鏡二面、詳細不明（破片のため）一三面である。さらに、これらとは別に沖ノ島の出土と伝わる、あるいは出土の推定される鏡が一面あり、総数八七面もの存在を推定できる。

本稿では、沖ノ島のなかでも充実した資料群である古墳時代銅鏡に着目し、その鏡群構成の通時的検討を出発点に沖ノ島祭祀の展開の一端を明らかにする。また、鏡群の様相を古墳出土鏡と比較し、沖ノ島祭祀と在地勢力の動向をつきあわせることによって、祭祀の主体を担った集団の把握を試み、祭祀にたいする王権の関与のあり方について論じる。

一 沖ノ島の鏡

沖ノ島の鏡については、一連の調査報告書が刊行されながらもなお不明な点が多くたが、重住真貴子・水野敏典・森下章司の悉皆的な調査・検討によつてその全体像がおおよそ把握された（重住・水野・森下二〇一〇）。また、それとは別に沖ノ島の出土と推定される資料の探索がなされるなど（花田一九九九二〇一二），着実に資料整備がすすめられた。さらには、資料の基礎的整備をふまえて、下垣仁志が沖ノ島出土鏡の総括的な評価をおこなつた（下垣二〇一八）。このように沖ノ島の鏡については資料の蓄積とそれにもとづく検討が一定程度すすめられた現状にあるが、かといって必ずしも論点がだしづくされているわけではない。そこで以下では、先行研究をトレースする部分も少なくないが、あらためて出土鏡を俯瞰するところから検討をはじめ、沖ノ島祭祀の動向を把握するための基礎的な材料を整理する。まずは検討の俎上にのせる沖ノ島の鏡の一覧を掲げたうえで（表1）、資料が豊富な倭鏡と三角縁神獸鏡についてその特徴を確認する。

表1 沖ノ島の鏡

出土地点	鏡式・系列	直径(cm)	位置づけ	備考
4号遺跡（御金蔵）	外区片(4-1-1)	破片	後期倭鏡新段階	
	外区片(4-1-3)	破片	後期倭鏡新段階新相	
	珠文鏡充壻系(4-1-4)	破片	後期倭鏡	
	外区片(4-1-5)	破片	後期倭鏡新段階新相	
	瑞祥文鏡(4-1-2)	14~15	後期隋唐式鏡	
4号遺跡（御金蔵）〔伝〕	三角縁波文帶三神三獸鏡(伝-3)	21.6	舶載第5段階	花田2012で推定18号遺跡
	旋回式獸像鏡系(伝-8-3)	12.2	後期倭鏡新段階古相	
	乳脚文鏡蕨手文系	11.2	後期倭鏡新段階新相	
	乳脚文鏡Ω字文系(伝-8-2)	9.2	後期倭鏡新段階新相	
	乳脚文鏡蕨手文系(伝-8-1)	8.9	後期倭鏡新段階新相	
7号遺跡	珠文鏡充壻系(7-1-2)	9.2	後期倭鏡新段階新相	
	盤龍鏡(7-3-1)	破片	同型鏡群	(8-2-3)と同型
	外区片(7-3-a)	破片	後期倭鏡新段階新相	
	外区片(7-3-2)	破片	—	
	素文鏡？(7-3-2・b)	破片	—	
8号遺跡	乳脚文鏡蕨手文系(8-2-1)	復10.3	後期倭鏡新段階新相	
	方格規矩鏡滿文系(8-2-2)	14.1	前期倭鏡新段階新相	
15号遺跡	盤龍鏡(8-2-3)	11.6	同型鏡群	(7-3-1)と同型
	神像鏡系(15-1)	9.2	前期倭鏡中段階	
	「仿製」三角縁唐草文帶三神三獸鏡(16-1)	20.6	「仿製」第4段階	(18-2)と同型
	方格T字文鏡(16-2-1)	9.1	華北系鏡群第7段階	
	内行花文鏡Ⅲ系(16-2-2)	6.9	前期倭鏡中～新段階	
16号遺跡	素文鏡系(16-2-3)	2.8~3.0	前期倭鏡？	
	八鳳鏡(17-1)	22.1	西晋鏡(280~300年ごろ)	
	方格規矩鏡獸文系(17-2)	27.1	前期倭鏡中段階	
	方格規矩鏡獸文系(17-3)	26.1	前期倭鏡中段階	
	方格規矩鏡獸文系(17-4)	22.1	前期倭鏡中段階	
17号遺跡	方格規矩鏡滿文系(17-5)	21.5	前期倭鏡新段階	
	方格規矩鏡鳥文系(17-6)	16.6	前期倭鏡中段階	
	方格規矩鏡獸文系(17-7)	17.8	前期倭鏡中段階	
	内行花文鏡Ⅱ系(17-8)	18.7	前期倭鏡中段階	
	内行花文鏡Ⅰ系(17-9)	17.6	前期倭鏡古段階	
	内行花文鏡Ⅲ系(17-10)	17.0	前期倭鏡新段階	
	「仿製」三角縁唐草文帶三神三獸鏡(17-11)	24.3	「仿製」第1段階	
	「仿製」三角縁唐草文帶三神三獸鏡(17-12)	21.6	「仿製」第5段階	
	「仿製」三角縁獸文帶三神三獸鏡(17-13)	20.0	「仿製」第5段階	
	鼈龍鏡双系(17-14)	12.9	前期倭鏡新段階新相	
	鼈龍鏡省略系(17-15)	23.7	前期倭鏡新段階	
	分離式神獸鏡A系(17-16)	16.7	前期倭鏡新段階新相	
	斜緣獸像鏡系(17-17)	10.0	前期倭鏡古段階	
	画象鏡系(17-18)	22.0	前期倭鏡新段階	
18号遺跡	斜緣神獸鏡A系(17-19)	16.4	前期倭鏡新段階	
	方格T字文鏡(17-20)	18.0	華北系鏡群第7段階	
	斜緣獸像鏡系(17-21)	15.0	前期倭鏡古段階	
	三角縁・天・王・日・月・獸文帶二神二獸鏡(18-1)	22.1	舶載第2段階	
	「仿製」三角縁唐草文帶三神三獸鏡(18-2)	20.6	「仿製」第4段階	(16-1)と同型
	「仿製」三角縁獸文帶三神三獸鏡(18-3)	23.4	「仿製」第4段階	
	「仿製」三角縁獸文帶三神三獸鏡(18-4)	21.1	「仿製」第3段階	
	獸像鏡A系？(18-5-1)	破片	前期倭鏡中段階	
18号遺跡〔推定〕	三角縁神獸鏡？(18-5-2)	破片	—	
	八鳳鏡(18-5-3)	破片	西晋鏡(280~300年ごろ)	
	方格規矩四神鏡(18-5-4)	18.0	漢鏡5期？	漢鏡ではなく同型鏡群とする見方もあり
	鉢片(18-5-5)	破片	—	
	破片(18-5-6・伝-7-2)	破片	—	
	「仿製」三角縁獸文帶二神三獸鏡(伝-7-4)	破片	「仿製」第5段階	(伝-6-1)と同型
	「仿製」三角縁獸文帶三神三獸鏡(伝-5)	22.1	「仿製」第3段階	
	方格規矩鏡四神文系(伝-4)	25.3	前期倭鏡中段階	
19号遺跡	三角縁神獸鏡(内区片・外区片)	破片	—	
	内行花文鏡Ⅲ系	10.0	前期倭鏡中段階	
	振文鏡羽文系	7.9	前期倭鏡中段階	
	素文鏡系(21-2-2)	3.5~3.9	—	
	内行花文鏡Ⅱ系(19-1)	24.8	前期倭鏡中段階	
21号遺跡	破片	破片	—	
	浮彫式獸帶鏡(21-1-1・21-2-a)	17.6	同型鏡群	
	浮彫式獸帶鏡(社外品)	17.6	同型鏡群	鏡の特徴から推定
	乳脚文鏡Ω字文系(21-1-2・21-1-b・21-2-b)	11.7	後期倭鏡新段階新相	
	振文鏡獸毛文系(21-1-3)	13.0	前期倭鏡古段階	
	破片(21-1-c)	破片	—	
	破片(21-2-c)	破片	—	
	破片(21-2-1)	破片	—	
	不明(21-1-14)	破片	—	
	素文鏡系(21-2-2)	2.2	—	
	鳥頭四獸鏡B系(伝-7-1)	12.1	中期倭鏡	鏡の特徴から推定
	滿文鏡B系(伝-7-3)	8.5	中期倭鏡	付着する土から推定
	珠文鏡列狀系(23-1)	6.0	前期倭鏡	
	珠文鏡充壻系(伝-9-1)	復9.0	後期倭鏡新段階新相	
沖ノ島〔伝〕	双頭龍文鏡(伝-6-2)	9.1	西晋鏡	
	乳脚文鏡系	6.1	後期倭鏡	
	乳脚文鏡系	—	後期倭鏡	
	「仿製」三角縁獸文帶二神三獸鏡(伝-6-1)	20.8	「仿製」第5段階	(伝-7-4)と同型
	斜緣神獸鏡B系	14.1	中期倭鏡	
宮地嶽付近古墳〔伝〕(沖ノ島遺跡〔推定〕)	八鳳鏡(18-5-3)	約18	西晋鏡(280~300年ごろ)	花田1999で推定18号遺跡
	方格規矩鏡獸文系	約14	前期倭鏡中段階	花田1999で推定18号遺跡
	画文帶同向式神獸鏡	20.7	同型鏡群	花田1999で推定21号遺跡
	画象鏡系(17-18)	18.2	前期倭鏡中段階	花田1999で推定21号遺跡
	内行花文鏡Ⅱ系	20.5	前期倭鏡中段階	花田1999で推定沖ノ島

(凡例) 鏡式名・系列名のあとに括弧内表記は重住・水野・森下2010の番号。

(二) 沖ノ島の倭鏡

鏡から沖ノ島祭祀の動向に迫るには、出土鏡の主体をなし、かつ遺跡各号から比較的まんべんなく確認される倭鏡の年代を参照するのが有効である。そこで、議論の基盤を整備するためにも、遺跡各号から出土した倭鏡の時期⁽³⁾を整理した(表2)。

全体の傾向　沖ノ島では一〇ヶ所もの遺跡各号で古墳時代倭鏡が確認されている。それらは倭鏡の年代という点から、大まかに三つの様相(様相①～③)として把握できる。様相①は前期倭鏡の大型鏡を主体とする鏡群構成であり、一七号遺跡が典型的である。様相②は後期倭鏡新段階を主体とする鏡群構成であり、七号遺跡を指標とするものである。そして、様相③は前期倭鏡・中期倭鏡・後期倭鏡新段階にばらつく鏡群構成であり、二一号遺跡が該当する。

様相①　前期倭鏡を主体とし、古段階・中段階・新段階にまたがる鏡群構成を示す。数量的には古段階、新段階、中段階の順に多くなり、とりわけ中段階の大型鏡五面、新段階の大型鏡三面の存在が注目される⁽⁴⁾。

また、様相①にみる鏡式の特徴に方格規矩

鏡系や内行花文鏡系がまとまって確認される点があり(図1)、このことは中段階に多い方格規矩鏡系や内行花文鏡系の大型鏡が目立つ点と関連すると考えてよい。いわば大型鏡指向であるがゆえに、必然的にそれが多い中段階に位置づけられるこれら資料の占める割合が高いのである。沖ノ島

表2 沖ノ島の倭鏡

出土地点	鏡式・系列	直径(cm)	前期倭鏡			中期倭鏡	後期倭鏡		
			古段階	中段階	新段階		古段階	新・古	新・新
4号遺跡 (御金蔵)	外区片(4-1-1)	破片						●	
	外区片(4-1-3)	破片						●4式	
	珠文鏡充填系(4-1-4)	破片						●	
	外区片(4-1-5)	破片						●4式	
4号遺跡〔伝〕 (御金蔵)	旋回式獸像鏡系(伝-8-3)	12.2						●2式	
	乳脚文鏡蕨手文系	11.2						●4式	
	乳脚文鏡Ω字文系(伝-8-2)	9.2						●3式	
	乳脚文鏡蕨手文系(伝-8-1)	8.9						●4式	
7号遺跡	珠文鏡充填系(7-1-2)	9.2						●4式	
	外区片(7-3-a)	破片						●	
	素文鏡系?(7-3-2・b)	破片							
8号遺跡	乳脚文鏡蕨手文系(8-2-1)	復10.3						●4式	
	方格規矩鏡渦文系(8-2-2)	14.1			○新相				
15号遺跡	神像鏡系(15-1)	9.2	○						
16号遺跡	内行花文鏡Ⅲ系(16-2-2)	6.9		○					
	素文鏡系(16-2-3)	2.8～3.0	○						
17号遺跡	方格規矩鏡獸文系(17-2)	27.1		○					
	方格規矩鏡獸文系(17-3)	26.1		○					
	方格規矩鏡獸文系(17-4)	22.1		○					
	方格規矩鏡渦文系(17-5)	21.5			○				
	方格規矩鏡鳥文系(17-6)	16.6		○					
	方格規矩鏡獸文系(17-7)	17.8		○					
	内行花文鏡Ⅱ系(17-8)	18.7		○					
	内行花文鏡Ⅰ系(17-9)	17.6	○						
	内行花文鏡Ⅲ系(17-10)	17.0			○				
	鼈龍鏡双胴系(17-14)	12.9			○新相				
	鼈龍鏡省略系(17-15)	23.7			○				
	分離式神獸鏡A系(17-16)	16.7			○新相				
	斜縁獸像鏡系(17-17)	10.0	○						
	画象鏡系(17-18)	22.0			○				
	斜縁神獸鏡A系(17-19)	16.4			○				
	斜縁獸像鏡系(17-21)	15.0	○						
18号遺跡	獸像鏡A系?(18-5-1)	破片		○					
18号遺跡 〔推定〕	方格規矩鏡四神文系(伝-4)	25.3		○					
	内行花文鏡Ⅲ系	10.0		○					
	振文鏡羽文系	7.9		○					
19号遺跡	素文鏡系(21-2-2)	3.5～3.9	—						
21号遺跡	内行花文鏡Ⅱ系(19-1)	24.8		○					
	乳脚文鏡Ω字文系(21-1-2・21-1-b・21-2-b)	11.7						●4式	
	振文鏡獸毛文系(21-1-3)	13.0	○						
	鳥頭四獸鏡B系(伝-7-1)	12.1			○				
	渦文鏡B系(伝-7-3)	8.5			○				
23号遺跡	珠文鏡列状系(23-1)	6.0	○						

[凡例] 鏡式名・系列名のあと括弧内は重住・水野・森下2010の番号。倭鏡の区分は本文註(3)を参照のこと。

にみるこの大型鏡指向は様相①に顕著であり、三角縁神獸鏡とセットをなす傾向を示すこととも整合する。なお、様相①は大型鏡を指向するが、それだけではなく中型鏡さらには小型鏡におよぶ多彩な鏡を構成に含む点も特徴的といえよう。

では、様相①の倭鏡にみる時期幅の存在についてはいかに理解すべきであろうか (e.g. 下垣一〇一二一・一〇四一一一)。一つは、複数回の「奉獻」行為の累積によって古段階から新段階に至るまでの鏡群構成が形成されたとする理解である。そしていま一つが、古段階から新段階までの鏡群が一括して限られた時期に「奉獻」された結果とみる理解である (原田一九六一 a .. 二五、岡崎一九七九 a など)。そこでこの点を解決するために、複数時期の倭鏡がみられる一七号遺跡の出土状況を確認する (原田一九六一 a .. 一二一二七)。以下にまず、報告書にみえる

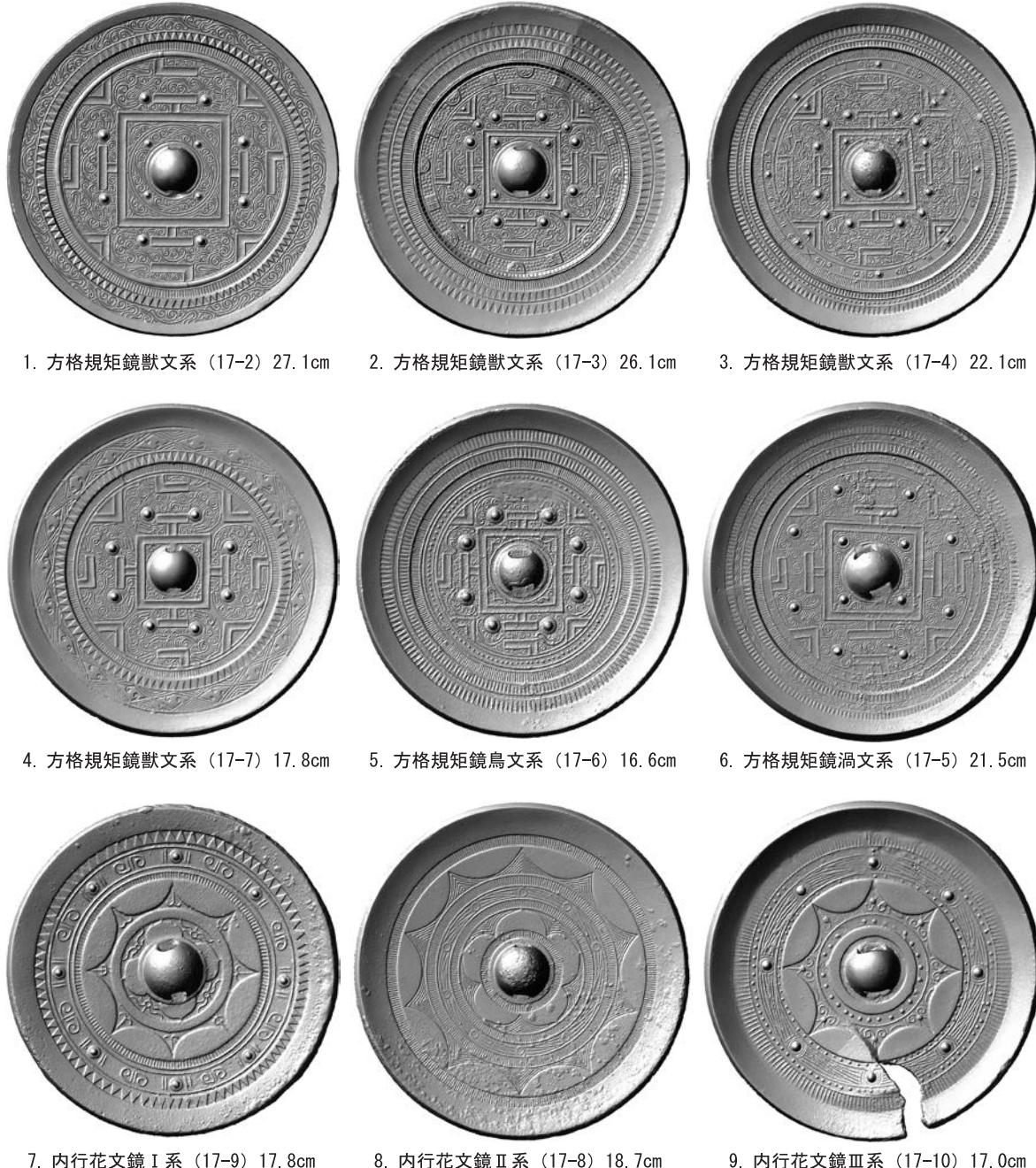


図1 17号遺跡（様相①）にみる方格規矩鏡系・内行花文鏡系倭鏡の卓越【縮尺不同】

注目すべき点を列挙する。

- 五号鏡（八鳳鏡・一七一一）以外の二〇面が鏡面を上にして重なりをもつて集積されていたこと。

- 方格規矩鏡系のなかでも最大径の七号鏡（一七一九）が最上部から、最下部からも方格規矩鏡系が出土したこと。

- 方格規矩鏡系、内行花文鏡系、三角縁神獸鏡は、同一鏡式が近接して出土したこと。

- 刀剣が二〇・二二号鏡の上面に配置されたとみられる状況で出土し、原位置から大きな移動が想定されないこと。

- 車輪石が鏡と鏡の間に配置され、かつ一三号鏡上の二号車輪石が破損していきたもののほぼ原位置をとどめる状態で出土したこと。

くわえて、倭鏡の時期と出土状況の対応をみると（図2）、最下部の二〇号鏡（一七一五）ならびに二一号鏡（一七一五）は、いずれも前期倭鏡新段階に位置づけられる。また、時期的に古相を示す三面の出土位置をみると、九号鏡（一七一七）は比較的上部から、一五号鏡（一七一九）は中位から、六号鏡（一七一七）は下位から出土している。時期的にもつとも新相を示す一四号鏡（一七一四）は中位から、三号鏡（一七一六）も中位からの出土である。このように、一七号遺跡では鏡の新古と出土位置には相関関係がみとめられないものである。

以上の出土状況と倭鏡の時期のつきあわせからは、一七号遺跡では限られた時期に鏡が一括して集積されたとみるのが妥当である。したがって、倭鏡の構成からその集積行為がなされた時期は鏡群の最新相を示す前期倭鏡新段階新相であり、古墳時代の相対編年⁽⁵⁾においては中期前葉古相（広域編年VI期）に比定

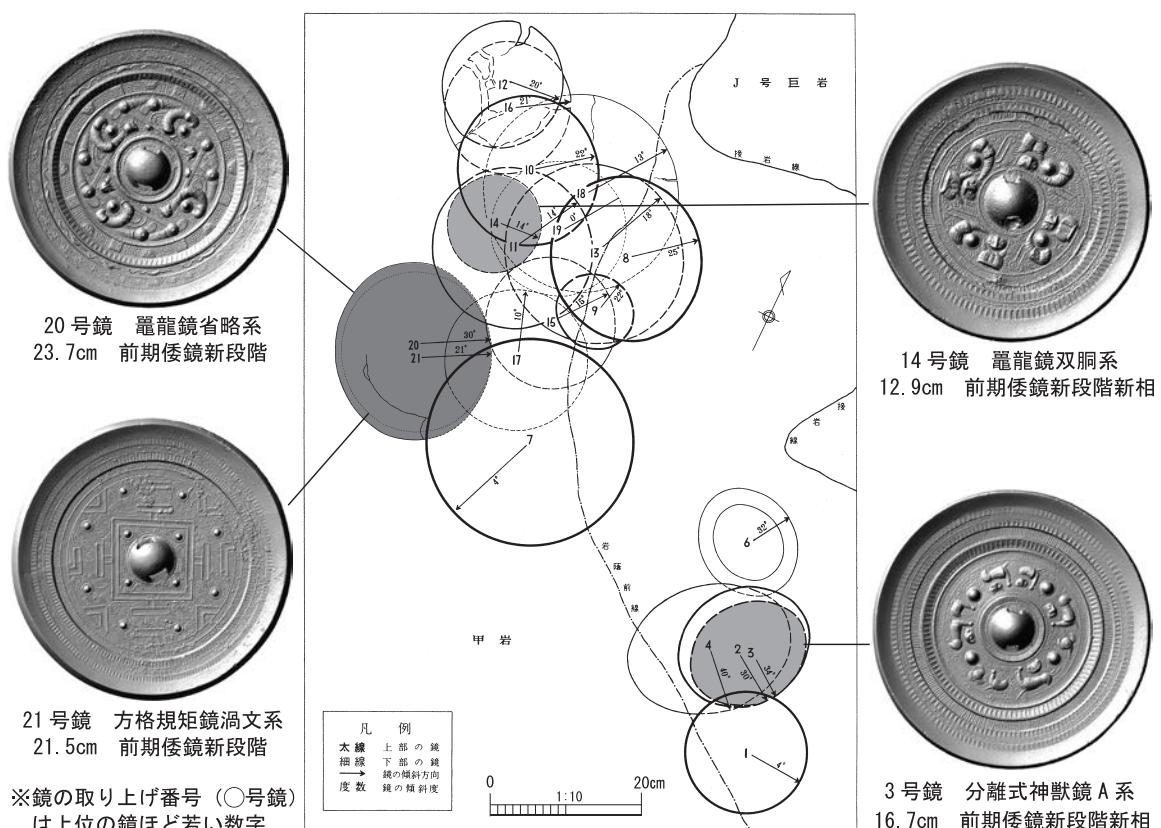


図2 沖ノ島17号遺跡における鏡の出土状況〔鏡は縮尺不同〕

できる（岩本二〇二一〇a・二〇一一一）。

様相② 後期倭鏡でも新段階の鏡を主体とし、小型鏡以下を中心とする。時期的には後期倭鏡新段階でも新相の例が圧倒的多数を占める（図3）。後期倭鏡新段階古相は古墳時代中期後葉新相（XI期）から、後期倭鏡新段階新相は後期前葉古相（XII期）から、それぞれ古墳への副葬がはじまる。様相②においては、後期倭鏡新段階でも最新相を示す例が主体を占めており、それらは後期中葉新相以降（単陶邑TK一〇型式新相段階）に副葬されはじめ、中心的な副葬時期は後期後葉（単陶邑TK四三型式段階）にある（岩本二〇二三a）。そのほかの器物の年代や出土状況から遺跡各号における「奉獻」行為が複数回におよぶのか、一回に限定されるものなのかを明確にはしがたいが⁽⁶⁾、倭鏡の構成においては後期後葉を中心とした時期に「奉獻」行為の一つのピークをみとめうる。

様相③ 前期倭鏡・中期倭鏡・後期倭鏡新段階の鏡が併存する（図4）。

様相①と様相②の要素をみいだせるだけでなく、ほかの遺跡各号では確認できない中期倭鏡の存在がひときわ注目される。中期倭鏡は伝資料にさらに一面あり、総数が三面と少ないながらもその時期にあたる「奉獻」行為が沖ノ島でおこなわれた可能性を示唆する点で重要である。このように、様相③は段階的かつ長期におよぶ倭鏡の構成である点が特徴的である。

古墳出土鏡では異なる時期の鏡が同時に副葬される例は少なくないが、様相③のように段階的かつこれほど長期におよぶ鏡群が一括副葬される例はほかに現状ではみあたらない。したがって、様相③は前期倭鏡・中期倭鏡・後期倭鏡新段階新相の三つの時期の累積と評価しうる余地があり、單一時

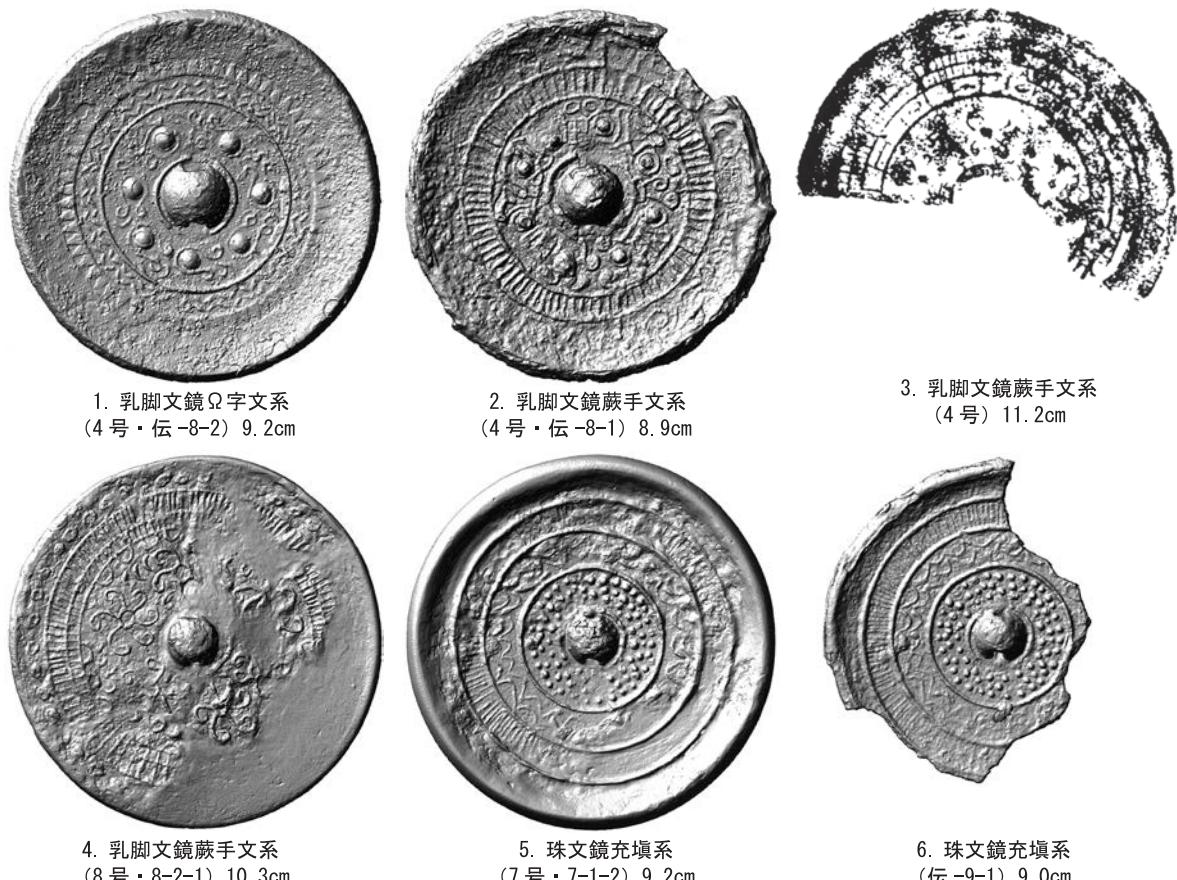


図3 様相②の後期倭鏡新段階鏡群 [縮尺不同]

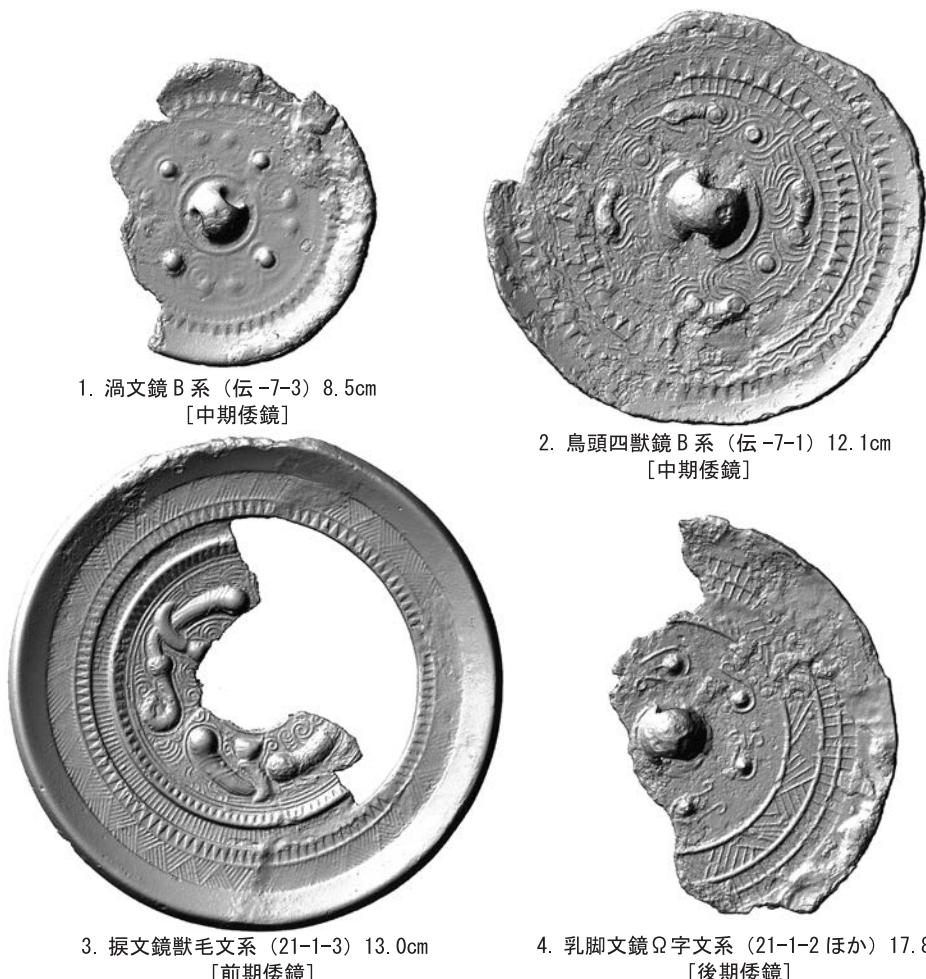


図4 様相③にみる前期倭鏡・中期倭鏡・後期倭鏡の併存 [縮尺1:2]

期の「奉獻」行為に起因するものではない可能性がある。そして、三つの時期はおおよそつぎのように把握できる。まず前期倭鏡段階は、様相①との関係から古墳時代中期前葉古相（VI期）に比定しうる。そして中期倭鏡段階は、中期倭鏡が古墳においては中期前葉古相（VI期）に副葬がはじまり、中期中葉新相（IX期）ごろまでは副葬例が一定数は目立つことから（e.g. 岩本二〇一三）、この時期幅でとらえておくのが妥当である。さらに後期倭鏡新段階新相の段階は、様相②でも述べたように後期後葉（⁴TK四三型式段階）を中心とした時期を想定できる。

なお、様相③には二一号遺跡が該当し、その形成年代を限られた時期とするこれまでの定説的な見方（松本一九七九）と、ある程度の時間幅においてなされた複数回の「奉獻」行為の累積とする見方（花田二〇一二・三九、e.g. 篠原二〇一一）とがある⁽⁷⁾。鏡の構成を見るかぎりは、二一号遺跡の形成は後者の見解のように複数時期におよぶ可能性が高いと考える。

（二）沖ノ島の三角縁神獸鏡

沖ノ島では特徴的な三角縁神獸鏡の出土傾向があり、それは東アジア史的な観点から沖ノ島祭祀の成立時期をとらえるうえできわめて重要な知見をもたらす。論点の重なる部分もあるが、倭鏡の様相①の評価とも密接にかかわるのであらためてとりあげておこう（表3）。

表3 沖ノ島の三角縁神獸鏡

出土地点	鏡番号	鏡式・系列	直径(cm)	配置	系統	鏡群	位置づけ
4号遺跡〔御金蔵〕〔伝〕	124	三角縁波文帶三神三獸鏡〔伝-3〕	21.6	K1	表現⑪	舶載K2群	舶載第5段階
16号遺跡	249	「仿製」三角縁唐草文帶三神三獸鏡〔16-1〕	20.6	K1	系統Ⅲ	「仿製」I群	「仿製」第4段階
17号遺跡	204	「仿製」三角縁唐草文帶三神三獸鏡〔17-11〕	24.3	K2	系統I	「仿製」D1群	「仿製」第1段階
	244	「仿製」三角縁唐草文帶三神三獸鏡〔17-12〕	21.6	K1	系統Ⅲ	「仿製」J群	「仿製」第5段階
	253	「仿製」三角縁獸文帶三神三獸鏡〔17-13〕	20.0	K1 変	系統Ⅲ	「仿製」J群	「仿製」第5段階
18号遺跡	91	三角縁・天・王・日・月・獸文帶二神二獸鏡〔18-1〕	22.1	J1	表現⑤	舶載F2群	舶載第2段階
	不明	外区片・内区片〔18-5-2〕	破片	—	—	—	—
	237	「仿製」三角縁獸文帶三神三獸鏡〔18-4〕	21.1	K1	系統II	「仿製」G群	「仿製」第3段階
	240	「仿製」三角縁獸文帶三神三獸鏡〔18-3〕	23.4	K1	系統Ⅲ	「仿製」I群	「仿製」第4段階
	249	「仿製」三角縁唐草文帶三神三獸鏡〔18-2〕	20.6	K1	系統Ⅲ	「仿製」I群	「仿製」第4段階
18号遺跡〔推定〕	214	「仿製」三角縁獸文帶三神三獸鏡〔伝-5〕	22.1	K2	系統I	「仿製」E群	「仿製」第3段階
	255	「仿製」三角縁獸文帶二神三獸鏡〔伝-7-4〕	破片	K1 変	系統Ⅲ	「仿製」J群	「仿製」第5段階
沖ノ島〔推定〕	255	「仿製」三角縁獸文帶二神三獸鏡〔伝-6-1〕	20.8	K1 変	系統Ⅲ	「仿製」J群	「仿製」第5段階

〔凡例〕鏡番号は三角縁神獸鏡目録の番号(岩本2020b)。配置は神獸像配置分類(小林1971)。系統は神獸像表現の異同を記し、舶載鏡については岸本直文による分類(岸本1989)、「仿製」鏡は筆者分類(岩本2003)に依拠する。鏡群および位置づけは筆者分類と時期比定を記す(岩本2020a)。トーンは終焉段階鏡群。

終焉段階鏡群の量的出

土 沖ノ島遺跡から出土した三角縁神獸鏡の最大の特色は、「仿製」三角縁神獸鏡の第四・五段階に位置づけられる、いわゆる終焉段階鏡群の存在につきる(図5)(岩本二〇〇五・二一〇一〇a)。この終焉段階鏡群を出土した古墳は、伝出土を含めると近畿地方の縁辺部を中心に一二基がこれまでに確認されており、ほかの中国鏡や倭鏡との共伴例はみとめられるものの、三角縁神獸鏡は一面のみの副葬にとどまる傾向を示す。また、終焉段階の三角縁神獸鏡の総数は三七面を数え⁽⁸⁾、沖ノ島遺跡ではそのうちの七面、じつに全体の約一九%が出土していることになる。また、沖ノ島遺跡から出土した三角縁

神獸鏡は総数一三面あり、そのうち五三・八%が終焉段階鏡群となるが、三角縁神獸鏡全体に占める終焉段階鏡群の割合は六・八%にすぎない。これらの数量的なデータからも、沖ノ島遺跡における三角縁神獸鏡の終焉段階鏡群の量的出土はきわめて特徴的かつ特異な現象なのである。

この三角縁神獸鏡にみる終焉段階鏡群への偏在は、沖ノ島で三角縁神獸鏡がおもに確認されたI号巨岩周辺の一六・一七・一八号遺跡の形成時期と不可分ではない。一六号遺跡で二四九鏡の一面、一七号遺跡で二四四・二五三鏡の二面、一八号遺跡(推定品を含む)で二四〇・二四九・二五五鏡の三面が集中的に出土しており、この時期に「奉獻」行為のピークがみとめられる。終焉段階鏡群は古墳時代中期前葉古相(VI期)に古墳への副葬時期を想定でき、その暦年代は鏡の製作年代ならばに馬具の製作年代と韓半島南部地域との併行関係の整理によって四世紀第4四半期ごろと推定できる(岩本二〇二〇a)。ここでは、三角縁神獸鏡の終焉段階鏡群が出土したI号巨岩周辺の一六・一七・一八号遺跡の形成ピークが古墳編年上の中前期前葉古相(VI期)であること、その暦年代が四世紀第4四半期ごろとなることを確認しておく。

終焉段階に先行する三角縁神獸鏡の評価

沖ノ島遺跡においては終焉段階の三角縁神獸鏡が量的に出土するいっぽうで、より古相を示す三角縁神獸鏡も少数ながら確認できる(図6)。それでは、終焉段階に先行する三角縁神獸鏡についていかに評価すべきであろうか。前節の倭鏡の項でも同様の検討をおこなったが、終焉段階鏡群に先行する三角縁神獸鏡を根拠に沖ノ島祭祀の成立時期が遡上する可能性がないのかをここでも確認し



1. 「仿製」三角縁唐草文帶三神三獸鏡（17号・17-12）
[244鏡] 21.6cm



2. 「仿製」三角縁唐草文帶三神三獸鏡（17号・17-13）
[253鏡] 20.0cm



3. 「仿製」三角縁唐草文帶三神三獸鏡（18号・18-2）
[249鏡] 20.6cm



4. 「仿製」三角縁唐草文帶三神三獸鏡（18号・18-3）
[240鏡] 23.4cm



5. 「仿製」三角縁獸文帶三神三獸鏡（16号・16-1）
[249鏡] 20.6cm



6. 「仿製」三角縁獸文帶二神三獸鏡（伝-6-1）
[255鏡] 20.8cm

図5 三角縁神獸鏡における終焉段階鏡群の卓越〔縮尺不同〕

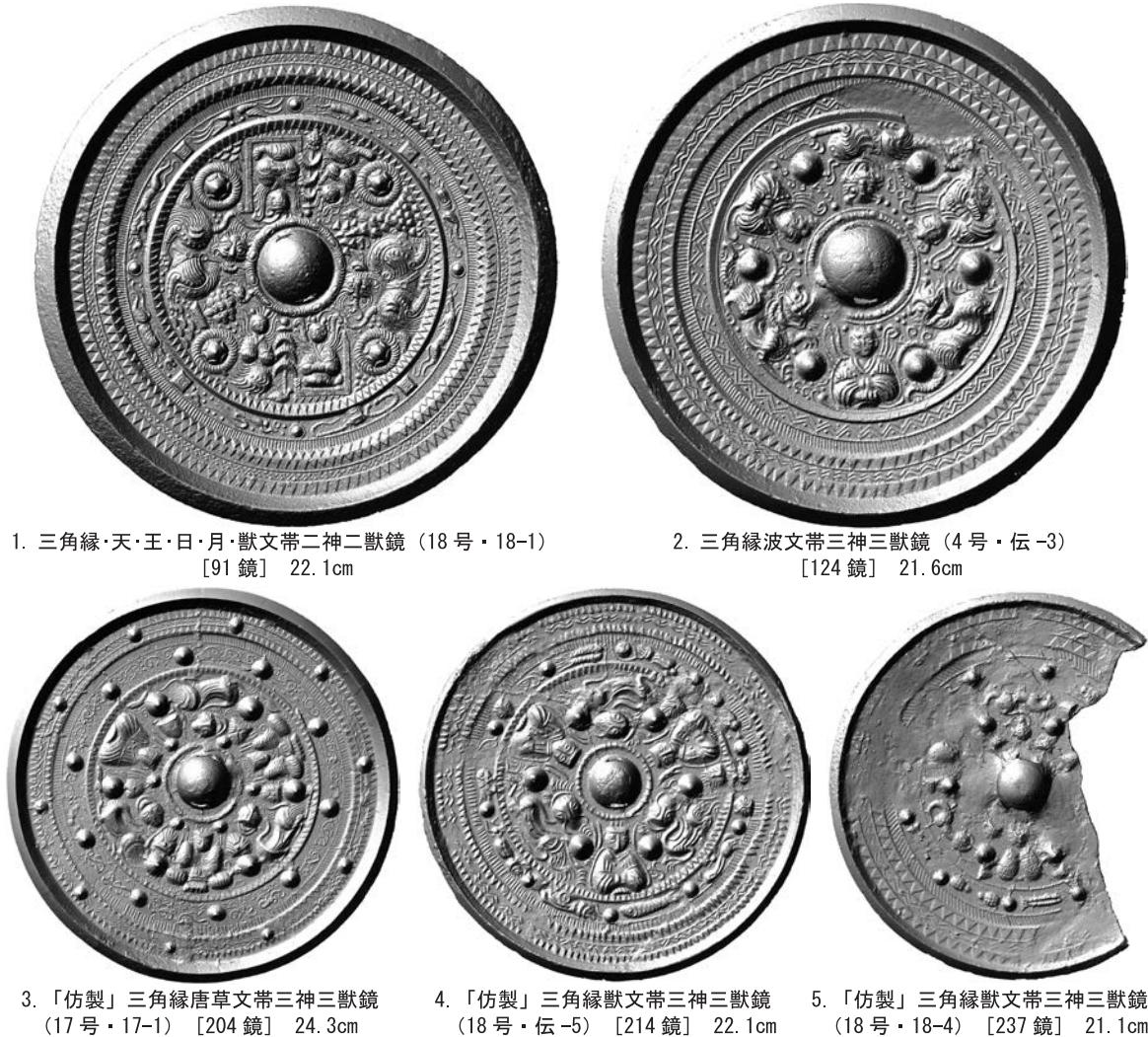


図6 終焉段階に先行する三角縁神獸鏡〔縮尺不同〕

ておく必要があろう。

一七号遺跡では、終焉段階鏡群の二面（二四四・二五三鏡）とともに「仿製」第一段階の二四四鏡が重ねられて出土している（原田一九六一-a・一九）。この出土状況からは、一括して三角縁神獸鏡が配置されたことが明らかである。また、I号巨岩周辺の遺跡各号の形成ビーグとみられる中期前葉古相（VI期）の古墳に副葬された「仿製」第一段階の例は、奈良県佐味田宝塚古墳や岡山県鶴山丸山古墳にもあり、これらの古墳副葬鏡が倭鏡の構成においても一七号遺跡と共通性を指摘できる点は示唆的である（e.g. 辻田二一〇〇七・二三三四一三三七・一〇一九・二四六一・五四、下垣二〇一八）。以上の状況から、時期幅のある三角縁神獸鏡が一括「奉獻」された可能性はきわめて高いと考える。

一八号遺跡では、沖ノ島でももつとも古相の三角縁神獸鏡が出土している。舶載第二段階に位置づけられる九一鏡である。また、終焉段階鏡群よりわずかに先行する例として「仿製」第三段階の二三七鏡がある。まず、舶載第二段階の鏡は出土例全体の二三%が「伝世」⁽⁹⁾例であり、I号巨岩周辺の遺跡各号の形成ビーグとみられる中期前葉古相（VI期）と同時期の古墳からも一〇面近くが出土している。また、「仿製」第三段階の例は前期後半新相（V期）に副葬が開始するので、中期前葉古相（VI期）での沖ノ島への「奉獻」は短期間の保

有でも生じうる。一八号遺跡では九一鏡と終焉段階鏡群を含めた四面の鏡が岩下に列状に配置されていたとの証言が残されており（原田一九六一b）、限られた時期の「奉獻」行為によるものであつた可能性が濃厚である。

以上のように、出土状況が明らかな例は限られるが、沖ノ島出土の三角縁神獸鏡には短期とはいがたい時期差がありながらも、それらが「奉獻」された時期はきわめて限定的であつたと判断できる。したがつて、沖ノ島祭祀の上限はやはり古墳編年上の中期前葉古相（VI期）にあり、四世紀第4四半期のなかで理解しうることを追認できるのである。

一一 鏡からみた沖ノ島遺跡の動向

先の検討結果をふまえて、鏡からみた沖ノ島祭祀の動向を整理する。同様の試みはすでに下垣仁志によつておこなわれているが（下垣二〇一八）、筆者の理解とは若干の違いもある。またそれだけでなく先行研究の多くも含めると、細かな部分でそれぞれに認識差が生じてゐるので、ここでは諸見解を相対化させつつ記述をすすめよう。

沖ノ島祭祀の成立〔第一期・成立期〕 いさざか迂遠な検討によつて追認したように、沖ノ島祭祀の成立は一七・一八号遺跡の形成段階とみてよい。しかし、その古墳時代における相対編年上の位置づけにはこれまで論者によつて微妙な認識の違ひがあつた。そもそも第二次調査の報告では、例示された諸古墳との関係から一七号遺跡を古墳時代前期後半新相（V期）ごろに位置づけていたようである（原田一九六一a）。また、第三

次調査の報告段階では、「仿製」三角縁神獸鏡・大型倭鏡・腕輪形石製品などから大まかに前期後半に比定しようとする意図がうかがわれる（岡崎一九七九b）。ところが、近年に三角縁神獸鏡および古墳の編年研究が進展した結果、鏡群構成や遺物組成から一七・一八号遺跡の形成時期は帶金式甲冑の出現時期と重なることがほぼ確定的となつたのである（大賀二〇〇二、森下二〇〇五、岩本二〇〇五・二〇二〇a、白石二〇一二）。

このように、相対編年上の沖ノ島祭祀の成立時期についての近年の諸見解は基本的に一致する。いっぽうで、曆年代についてはなおずれがある。具体的には、白石太一郎が四世紀中葉から第3四半期（白石二〇一二）、

下垣仁志も四世紀第3四半期に沖ノ島の形成年代を想定するが（下垣二〇一八）、筆者は四世紀第4四半期とみる（岩本二〇二〇a）。四世紀第3四半期説は須恵器の出現時期を一部の年輪年代資料^⑯にもとづき四世紀第4四半期に比定するため、それにともない中期の開始年代を遅くとも四世紀第3四半期に遡上させる（白石二〇一二）。しかし、前期後半古相（IV期）は交差年代によつて金官加耶Ⅲ段階^⑰と接点をもち（岩本二〇一六）、金官加耶Ⅲ段階は三燕系の各種金工品から四世紀第2四半期に比定できる（沈二〇一三・二〇一六）。そして、前期後半新相（V期）がやはり交差年代によつて金官加耶Ⅳ段階にほぼ併行し（岩本二〇一六）、金官加耶Ⅳ段階の古墳から出土する馬具からその年代は四世紀第3四半期ごろと大まかに推定しうる（諫早二〇〇八）。このように、日本列島と韓半島南部との併行関係を矛盾なく把握でき、かつ韓半島南部において一定数の暦年代資料が存在する状況からは、沖ノ島祭祀の成立時期となる中期

前葉古相（VII期）を四世紀第3四半期に引き上げることには賛同できない。

後続する中期前葉新相（VIII期）が金官加耶VI段階と併行することは陶質土器や馬具からも想定されるところであり（岩本二〇一二）、馬具からその年代が四世紀末を下ることは確実なため（諫早二〇〇八）、やはり中期前葉古相（VII期）は四世紀第4四半期のなかでとらえておくのが妥当である。要するに、沖ノ島祭祀の成立年代を四世紀第4四半期とする見方が、東アジアの考古資料全体をもつとも整合的に理解しうるのである。

沖ノ島祭祀の変質〔第二期：変質期〕 複数面の中期倭鏡が確実に存在しており、中期前葉から中葉（VI～IX期）に「奉獻」行為がおこなわれたとみられる。ただし、中期倭鏡は前期倭鏡に比べると面数が圧倒的に少なく（二号遺跡で二面）、一七・一八号遺跡などI号巨岩周辺でおこなわれた「奉獻」行為とは内容はもとより背景をも異にする可能性が高い。

いっぽうで、七・八・二一号号遺跡では同型鏡群が確認されており、それらがこの時期に該当する可能性はある（e.g. 小田二〇一二、辻田二〇一二・二〇一八）。しかし、同型鏡群については後述するように第三期との関連性を考えたほうが、出土鏡全体の様相を整合的に説明できる。

なお、下垣仁志は第二期を「停滞期」とし、鏡を用いた祭祀が細々ではあるが継続していたとみる（下垣二〇一八）。

沖ノ島祭祀の再興〔第三期：再興期〕 鏡の「奉獻」行為がふたたび活性化するのは、後期倭鏡新段階の時期である。遺跡各号における鏡の構成をみると、あきらかに後期倭鏡新段階のなかでも最新相の資料が多く、ここにピークがみとめられる。後期倭鏡新段階古相の例も含めて、後期倭鏡

新段階新相の時期にまとまつた数の鏡が「奉獻」されたとみてよいだろう。

また、同型鏡群が確認されている七・八・二一号遺跡では、いずれも後期倭鏡新段階新相の鏡が出土しており、同型鏡群と後期倭鏡新段階新相鏡群との時期的な親和性をよみとることが可能である（cf. 小田二〇一二、辻田二〇一二・二〇一八）。そして、上述したように、後期倭鏡新段階でも最新相の鏡の中心的な副葬時期は後期後葉（非TK四三型式段階）にある。したがって、鏡からみた沖ノ島祭祀の再興は古墳時代後期後葉の事象と位置づけられよう。

小結 以上、出土鏡の様相にもとづき、鏡からみた沖ノ島祭祀の展開を大まかに三つの時期として把握した。しかし、この見方は必ずしも先行研究の理解とは合致していない。その原因は二一号遺跡の評価の違いにつきる。そして、その評価は沖ノ島祭祀における同型鏡群の位置づけとも密接にかかわる。具体的には、下垣仁志は本稿の第三期にあたる時期を「復興期」とするが、その時期を中期後葉新相（XI期）とし、同型鏡群の出現時期にさかのぼらせる（下垣二〇一八）。あるいは、辻田淳一郎は二号遺跡と勝浦峯ノ畠古墳の関係性を高くみて、その時期をおおよそ中期中葉新相（IX期）とし、同型鏡群の出現時期をも古くとらえる（辻田二〇一八）。辻田の理解では、二号遺跡の同型鏡群は第二期に位置づけることになり、そこにも沖ノ島祭祀の一時的な勃興を想定することになる。このように、沖ノ島祭祀の実態に迫るうえで二号遺跡の評価はきわめて重要な位置を占めており、その再検討は喫緊の課題なのである。

三 鏡からみた沖ノ島祭祀の主体

それでは、鏡からみた沖ノ島祭祀の展開として示した三つの時期の背景に迫るため、各時期の沖ノ島祭祀の主体について検討をおこなうことによう。その際、とりわけ宗像地域の古墳の築造動態との対比にもとづいて沖ノ島祭祀への在地勢力のかかわりを勘案しつつ、この問題を考えることとする。

鏡の「伝世」と成立期祭祀の主体 沖ノ島祭祀の成立の問題は、鏡の「伝世」と無関係ではない。というのは、第一期の沖ノ島祭祀の成立を中心前葉古相（VI期）とするならば、倭鏡にせよ三角縁神獣鏡にせよ数は多くないが、「伝世」した鏡が含まれるからである。鏡の「伝世」については、製作後スムーズに授受されることが基本的なあり方であるため、各地の地域社会でおこなわれたとする理解が趨勢を占める（小林一九五五、森下一九九八・二〇一二、下垣二〇〇三b・二〇一三など）。しかし裏を返せば、この理解は配布元である倭王権周辺での「伝世」を小さくみつめることになる。その場合、第一期における沖ノ島の鏡群構成については、古相を示す鏡が地域社会で「伝世」したのち、リアルタイムにもたらされた鏡とともに「奉獻」されたか、王権による複数回におよぶ鏡の「奉獻」の累積とする評価を下すことになる。しかし、そうした見方が成り立ちがたいことはすでに述べた。なぜなら、特定鏡式の大型鏡が集積される状況は、保有対象の選択に偶然がつきまとった地域社会での「伝世」の累積では説明しづらく、また新古の鏡が一括して配置された出土状況は複数回の「奉獻」と

そぐわないからである。したがって、「伝世」された鏡が第一期の沖ノ島祭祀で一括「奉獻」されるには、倭王権周辺での恒常的な鏡のストック形成を考慮するのがもつとも無理がないのである。

成立期前後ににおける周辺古墳の鏡副葬

成立期における沖ノ島祭祀への在地勢力の直接的な関与を積極的には評価せず、王権の主導によるものとする理解は、この時期の北部九州における大型鏡の不在傾向から導出された（辻田二〇〇七、e.g. 岡崎一九七九bなど）。この見方は、先に述べた

鏡の「伝世」を背景とした王権の沖ノ島祭祀への直接的関与を高くみる想定とも調和的である。

そこで沖ノ島祭祀成立期の宗像地域の古墳出土鏡、つまり中期前葉古相（VI期）前後までの例を確認してみると（表4）、墳丘規模二〇m級以下の小規模墳では径一〇cm以下の鏡が、墳丘規模三〇m級の中規模墳では径一五cm未満の小型鏡が副葬され、いずれも保有量は一面にとどまる傾向を確認できる（図7）。しかも、沖ノ島祭祀成立期の宗像地域の中心的墓域となる津屋崎古墳群では古墳の築造そのものがやや低調といわざるを得ず（e.g. 池ノ上・花田二〇〇〇、重藤二〇一一・二〇一八など）、卓越した規模を誇る古墳の存在を確実視できない（図8）。こうした現状においては、I号巨石周辺の一七・一八号遺跡出土鏡の質・量にみる卓越は明白であり、在地勢力が沖ノ島祭祀の成立に主体的に関与したとはいがたい。宗像地域の動向において沖ノ島祭祀の成立はきわめて画期的かつ大規模な事象であることから、やはりその主体を担つたのは倭王権であつたと考えるのがふさわしいのである。

表4 宗像地域の古墳出土鏡

所在地	古墳名	墳形（墳丘規模）	鏡式名・系列名	直径(cm)	鏡の位置づけ	共伴副葬品	古墳時期
宗像市	徳重本村2号墳 (盛土)	前方後円墳(19)	鳥頭四獸鏡A系	8.2	前期倭鏡古段階	—	III期?
	久原III-4号墳	円墳(18m)	蝙蝠座内行花文鏡(破鏡)	[12.8]	漢鏡6期	斧1、刀子1	古墳前期
	稻元久保14号墳	円墳(14m)か 前方後円墳(30?)	内行花文鏡(破鏡)	[復14.7]	漢鏡5期	玉類	V・VI期ごろ
	上高宮古墳	円墳(25~28)	神頭鏡系	12.1	前期倭鏡新段階	長方板革綴短甲1、刀 剣6以上、銅鏡6、鉄 鏡40、勾玉20、管玉 11、斧2、刀子4など	VI・VII期
	大井池ノ谷3号墳 (第2主体)	円墳(15)	捩文鏡俵文系	7.7	前期倭鏡中段階	刀子	VI・VII期
	田熊下平井1号墳	円墳(15)	捩文鏡羽文系	8.1	前期倭鏡新段階	鉄鏡、竖櫛2	VI・VII期ごろ
福津市	渡	不明	方格T字文鏡	9.2	西晋鏡	—	—
	手光長畑古墳	円墳(6~18)	珠文鏡系?	6.4	—	—	—
	福間割畑1号墳	円墳(10)	分離式神獸鏡B系	7.3	中期倭鏡	刀4、銅鏡1、鉄鏡11、 斧1、鑿1、鉈2、鑿3、 刀子2、鑷子1	VI・VII期ごろ
	奴山正園古墳	円墳(29~28)	双頭龍文鏡	復10.1	西晋鏡	筒形銅器1、滑石有孔 円板7、各種玉類、三 角板革綴短甲1、刀剣 68、斧5、鎌1、鑿5、 鉈3、刀子4、鑷先1、 針36以上	VIII期
	勝浦峯ノ畑古墳	前方後円墳(97)	細線式獸帶鏡(1号鏡) 画文帶同向式神獸鏡(2号鏡) 画文帶同向式神獸鏡(3号鏡) 内行花文鏡III系(4号鏡) 獸像鏡B系か 鳥頭獸像鏡系(6号鏡) 獸像鏡B系(7号鏡) 乳脚文鏡Ω字文系(8号鏡) 不明倭鏡片(その他)	復約23 復約21 復約21 約9.7 約14.5 復約14 約8.5 不明	同型鏡群 同型鏡群 同型鏡群 前期倭鏡中段階 後期倭鏡古段階 後期倭鏡古段階 後期倭鏡新段階古相 後期倭鏡古段階か	横矧板銅留短甲1、銀 装素環頭大刀1、鹿角 装刀劍43以上、銅鏡 285、輪鏡1、壺鏡1、冠、 銅钏、各種玉類、その 他金銅製品、土師器、 須恵器など	XI期

〔凡例〕直径の〔 〕は破鏡であることを示す。墳丘規模の単位はm。資料の集成に際しては下垣2016を参照した部分が大きい。



1. 斜縁四獸鏡A系（徳重本村2号墳盛土）8.2cm
 2. 蝙蝠座内行花文鏡（久原III-4号墳）破鏡12.8cm
 3. 内行花文鏡（稻元久保14号墳）破鏡14.7cm
 4. 神頭鏡系（上高宮古墳）12.1cm
 5. 捷文鏡俵文系（大井池ノ谷3号墳）7.7cm
 6. 捷文鏡羽文系（田熊下平井1号墳）8.1cm
 7. 分離式神獸鏡B系（福間割畑1号墳）7.3cm

図7 在地勢力の古墳出土鏡〔縮尺不同〕



1. 伝沖ノ島（伝-6-2）9.1cm



2. 奴山正園古墳 復 10.1cm

図9 沖ノ島と奴山正園古墳の双頭龍文鏡
〔縮尺不同〕

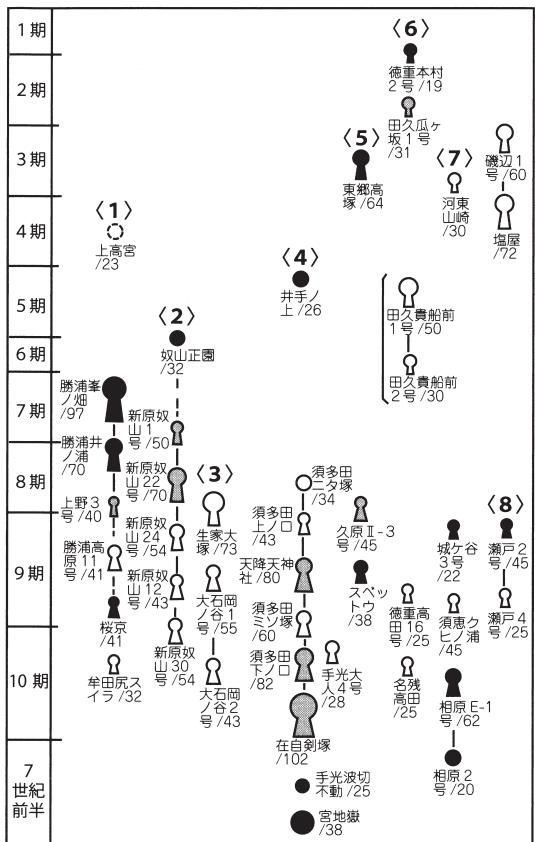


図8 宗像地域の古墳にみる在地勢力の動向
(重藤 2018 を引用)

ただし、厳密には成立期のものといえるかが不明であるが、一五・一六号遺跡の一部では同時期の宗像地域で副葬された古墳出土鏡と近似するサイズの小型鏡が確認されている点には注目しておきたい。想像の域を出ないが、これら小型鏡が在地勢力によって「奉獻」された可能性は少なからず考慮しておく必要があろう。その場合、王権と在地勢力が連携した可能性が生ずるが、そうだとしても沖ノ島祭祀の成立に際しての倭王権の直接的関与の大きさは搖るがないであろう。

変質期の沖ノ島祭祀とその主体 成立期にたいして著しく鏡の量・質が変化することから、変質期を設定しうることはすでに述べたとおりである。そして、この変質期を評価するうえで重要な位置を占めるのが、F号巨岩上に展開する二号遺跡である。二号遺跡については不明な点が多いが、石製品・滑石製品からは中期前葉古相（VI期）以降、中期中葉新相（IX期）ごろまでは断続的に資料がみとめられるという（篠原二〇一）。さらに、清喜裕二が示唆するように、有孔円板など新たな祭祀具の導入が共通する点で、二号遺跡と奴山正園古墳に関係が想定される点には注目しておく必要がある（清喜二〇一八）。津屋崎古墳群でも新原・奴山系列の初造墳にあたる奴山正園古墳は、各種の副葬品から中期中葉古相（III期）に比定でき、二号遺跡にみる中期倭鏡と時期的にも整合的なあり方を示す。沖ノ島では伝資料ながら双頭龍文鏡が確認されており、近似した鏡が奴山正園古墳に副葬されていることも関連性の深さを傍証する（図9）。在地勢力による沖ノ島祭祀への直接的関与をこの時期に想定しうるのである。

くわえて、滑石製品の石材の一部が中期中葉新相（IX期）ごろに現

地調達されたものへとシフトしているという指摘も重要である（篠原二〇一）。この指摘が妥当ならば、奴山正園古墳との関係も含めて、第二期の変質期に沖ノ島祭祀への在地首長の関与が発生したとする根拠がさらににもたらされることになる。またそう考えると、二号遺跡の形成は單一時期ではなく、複数時期におよぶ「奉獻」行為の累積によるものである可能性が高まることになる。

いっぽうで、同型鏡群の存在から二号遺跡と勝浦峯ノ畠古墳との関連性が指摘されるが（小田一〇一二、辻田一一〇一二・一〇一八）、この点については少なからず留保が必要と考える（図10）。同型鏡群という共通性だけではなく、勝浦峯ノ畠古墳の築造時期を中期中葉新相（IX期）に引き上げる見方も二号遺跡との関連を想定する重要な根拠となつており（辻田二〇一八）、これについても再考の余地がある。たしかに、勝浦峯ノ畠古墳には鉄鏃や馬具に石室や埴輪の時期より古相を示す資料がある。しかし、それらを初葬時の副葬品と限定し、古墳の築造年代を遡上させる再報告の時期比定の手続きには注意を要する（e.g. 池ノ上・岸本二〇一）。副葬鏡の組み合わせをみると、複数面の同型鏡群のほか前期倭鏡、後期倭鏡古段階、後期倭鏡新段階古相におよぶ幅広い製品があり（図11）、下限を示す後期倭鏡新段階古相の年代は石室や埴輪から導出される年代と一致する（岩本二〇二二）。その時期は中期後葉新相（XI期）である。これを勝浦峯ノ畠古墳の築造時期とみると、それは鏡からみた沖ノ島祭祀においてもつとも低調な時期に相当する可能性が高い。さらに、この時期は鏡以外のほかの遺物も二号遺跡においては希薄であり、勝浦峯ノ畠古墳との関連を

積極的に評価する材料は乏しいといわざるを得ない⁽¹²⁾。

再興期の沖ノ島祭祀とその主体 変質期のあと空白期を経てふたたび鏡の「奉獻」行為がおこなわれるのは、後期後葉（PTK四三型式段階）である。この段階は、四・七・八号遺跡といった岩陰祭祀が本格始動する時期にあたる（e.g. 小田一九七九、佐田一九八八）。注目すべきは、この時期に津屋崎古墳群においてはいったん縮小傾向にあった首長墓の規模がふたたび拡大傾向に転ずる点である。すなわち、須多田下ノ口古墳（前方後円墳八二m）や在自劍塚古墳（前方後円墳一〇二m）が築造されるのである。沖ノ島祭祀と古墳築造の画期が合致する状況からは、両者の高い連動性として、こうした大型前方後円墳とのかかわりを考慮すれば、再興期に同型鏡群が倭鏡とともに「奉獻」された可能性が浮上する。またその場合、再興期に関与した在地勢力は須多田系列に属することになり、変質期に関与したとみられる在地勢力の新原・奴山系列や、先行研究で二号遺跡との関連が想定されてきた勝浦峯ノ畠古墳が属する勝浦系列とは異なる点が注目される⁽¹³⁾。変質期以降の沖ノ島祭祀の勃興に際しては、首長墓系譜の変動が少なからず影響をおよぼした可能性が考慮されよう。

なお、鏡からは再興期の沖ノ島祭祀は岩陰祭祀に限定されず、岩上祭祀にあたる二号遺跡においてもおこなわれており、先行した祭祀を踏襲するような対応がみとめられる点には一定の注意を払っておきたい。こうした対応は、変質期以降に二号遺跡で想定されるような複数次におよぶ「奉獻」行為にも通ずる可能性があろう⁽¹⁴⁾。



図 10 沖ノ島 21 号遺跡の同型鏡群 [縮尺不同]



図 11 勝浦峯ノ畠古墳出土鏡 [縮尺不同]

四 沖ノ島の鏡と古墳副葬鏡

方格規矩鏡と内行花文鏡の卓越 本稿では、沖ノ島祭祀の成立に倭王権の直接的関与をみとめうることを出土鏡に即して論じてきた。ここでは、その見方をさらに別の観点から補強する。一七号遺跡では方格規矩鏡系と内行花文鏡系の倭鏡が量的にまとまり、そこに大型鏡が含まれている点が特徴的であることは上述したとおりである。同様の構成は、古墳においてもみとめられる。倭鏡であれば岡山県鶴山丸山古墳や奈良県新山古墳⁽¹⁵⁾、舶倭の別を問わなければ奈良県大和天神山古墳などがその典型例となる。

このうち、大和天神山古墳では副葬鏡群に占める大型鏡の主体をなすのが方格規矩鏡と内行花文鏡であり、舶倭の違いはあるにしても一七号遺跡と鏡式や面径の選択に通じるところがある。一七号遺跡に限らず、沖ノ島で大型の内行花文鏡や方格規矩鏡が多いことは、鏡にたいする王権の意図的な選択の結果による可能性が高いのである。

沖ノ島における文様不鮮明鏡 上記した大和天神山古墳の副葬鏡群に顯著な特徴として、文様不鮮明鏡にみる一定のパターンの存在を指摘できる。すなわち、副葬鏡群のなかでも①内行花文鏡⁽¹⁶⁾、あるいは②総じて面径の小さな鏡に文様不鮮明鏡が偏在する傾向がみられる（図12—1—4）。これは必ずしも絶対的なものではないが、ほかの古墳出土鏡においても同様の傾向があり、とくに②副葬鏡群のなかで面径の小さな鏡に文様不鮮明を確認できる例は散見される（図12—7—9）。たとえば、三角縁神獸鏡出土古墳でも山口県長光寺山古墳の内行花文鏡、宮ノ洲古墳の内行花文鏡、

兵庫県城の山古墳の斜縁四獸鏡、西求女塚古墳の浮彫式獸帶鏡、ヘボソ塚古墳の画文帶環状乳神獸鏡、阿保親王塚古墳の内行花文鏡、大阪府茶臼塚古墳の斜縁四獸鏡A系、京都府百々ヶ池古墳の上方作系浮彫式獸帶鏡、園部塙内古墳の盤龍鏡、福井県花野谷一号墳の連弧文銘帶鏡、山梨県大丸山古墳の八禽鏡などは、副葬鏡群でも最小の鏡に顯著な文様不鮮明をみとめる例である。したがって、文様不鮮明鏡にみるダブルスタンダードのようあり方は、個々の事例に限定されるのではなく、広域に共通する規範を反映している可能性がある。

そして、この文様不鮮明鏡にみる傾向は沖ノ島遺跡でもみいだせる（図13）。具体的には、一七号遺跡では径一〇・〇cmの斜縁獸像鏡系（一七一—七）が最小であり、一七号遺跡で唯一の文様不鮮明鏡である。内区については顯著ではないものの、外区文様が不鮮明になるとともに、縁頂部は丸みを帯びている。ほかにも一五号遺跡の神像鏡系（一五一—）が径九・二cm、一六号遺跡の内行花文鏡III系（一六一—一二）が径六・九cm、二一号遺跡と推定される渦文鏡B系（伝一七一—三）が径八・五cmであり、いずれも遺跡各号において最小サイズの製品が文様不鮮明鏡である⁽¹⁷⁾。こうした沖ノ島の文様不鮮明鏡にみる古墳副葬鏡との共通性は、沖ノ島の鏡が古墳副葬鏡とまったく別の枠組みで用意されたわけではない可能性をうかがわせる。また文様不鮮明鏡の存在は、沖ノ島の鏡が成立期祭祀においても必ずしも大型鏡のみに特化していたのではなく、中型鏡ならびに小型鏡をも鏡群に含む点において古墳副葬鏡との同質性を示すものと評価できよう。ただし、これらの文様不鮮明鏡が小型鏡以下にとどまる点は、すでに



図 12 文様不鮮明鏡にみる傾向 [縮尺不同]

述べたとおり、それらが王権ではなく在地首長による沖ノ島祭祀への関与を示す余地のある点では注意が必要である。

沖ノ島祭祀への王権の関与とその変質

以上に述べたように、沖ノ島に「奉獻」された鏡は基本的には古墳副葬鏡と共通する。そして、ここまで検討結果をふまえるならば、「奉獻」に近接した時期に王権が保有するストックから抽出され、沖ノ島に鏡がもちこまれた可能性が高い。いっぽうで、古墳副葬鏡と同質性がありながらも、終焉段階の三角縁神獸鏡、方格規矩鏡、内行花文鏡の多さとそれらの大型鏡が占める割合の高さは、沖ノ島祭祀における成立期の画期性を物語る特徴であることはくりかえし述べてきたとおりである。そして、一七・一八号などI号巨岩周辺の遺跡各号で「奉獻」された鏡の量・質は、変質期や再興期としたほかの時期の「奉獻」とは一線を画す内容であり、その内容の違いの背景には沖ノ島祭祀にたいする王権の関与の度

合いが反映されているとみてよいであろう。すなわち、沖ノ島祭祀の成立は王権の直接的関与によって達成された可能性が高く、王権の関与は時期を追って在地勢力を介した間接的な内容にシフトしていくと考えられる(e.g. 下垣二〇一八、cf. 小田二〇一二、辻田二〇一二・二〇一八)。変質期および再興期にあたる中期倭鏡と後期倭鏡の内容は、列島各地の在地首長層の副葬鏡と基本的には変わることのない点からは、王権による強い介入を想定しにくいのである。

いっぽうで、王権の間接的関与に移行したといつても、変質期から再興期までには空白期間が想定され、その間には在地勢力においても首長墓系譜に変動がみいだされる。その変動を積極的に評価すると、変質期と再興期とでは沖ノ島祭祀への王権による間接的関与の背景が異なっていた可能性も考慮できる。再興期が沖ノ島における本格的な岩陰祭祀の始動と重なる点は、在地勢力にみる有力集団の交替といった背景の変化を想定する見方と矛盾しない。後期後半の一〇〇m級前方後円墳の築造が列島規模でも

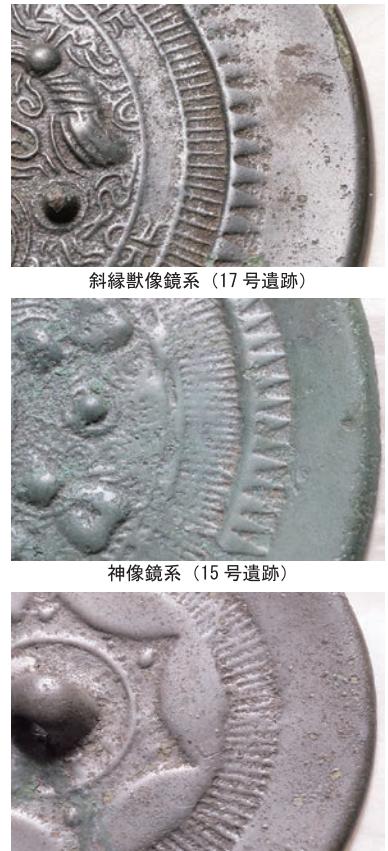


図 13 沖ノ島出土の文様不鮮明鏡

限定的である点をふまえるならば、再興期の沖ノ島祭祀に関与したとみられる宗像地域が王権主導の対外交渉と地域経営の一拠点として機能した可能性は高い (e.g. 土生田二〇一二、広瀬二〇一〇¹⁸、仁木二〇一九、松木二〇一二など)。とすれば、再興期の沖ノ島祭祀はそうした王権の一拠点を付託された在地勢力の手によるもので、直轄的な意味合いを強く帯びた王権の間接的な関与を想定しておくのが妥当であろう。

おわりに

本稿では沖ノ島出土の古墳時代銅鏡を俯瞰して三つの様相をみいだすとともに、それぞれの様相の特徴を明らかにした。そのうえで、沖ノ島における鏡の「奉獻」を大きく三時期に整理し、各時期における王権と在地勢力による沖ノ島祭祀への関与についても検討を試みた。

具体的には以下の内容が要点となる。①成立期（第一期）を古墳時代中期前葉古相（VII期）に比定し、その暦年代を四世紀第4四半期としたこと、

②再興期（第三期）を後期後葉（非TK四三型式段階）とみて、岩陰祭祀の本格始動と関連づけたこと、③変質期（第二期）を中期前葉から中葉（VI-VII期）における「奉獻」行為の累積である可能性のあることなどである。そのうえで、沖ノ島祭祀の成立にみる画期性の背後には倭王権の直接的関与を高くみつもれるが、鏡の質・量の変化から変質期以降は在地勢力の関与が想定されることを論じた。また、在地勢力の首長墓系譜にみる変動から、変質期と再興期では沖ノ島祭祀にたいする在地勢力の関与の背景

が異なると考えた。このように変質期以降に沖ノ島祭祀への在地勢力の関与が強まつたとしても、それは王権の関与を否定するものではなく（下垣二〇一八）、王権が在地勢力を介して沖ノ島祭祀に間接的に関与した可能性を考慮しておくべきである。とくに、再興期における王権の関与は間接的であつたとしても、小さくみつもれるものではない点を強調しておきたい。

以上の仮説を検証するためには、沖ノ島の遺跡各号のさらなる実態把握が不可欠となる。すなわち、鏡はもとよりほかの遺物を含めて、時期差を認識できるまとまりが遺跡各号にどの程度あるのかを明らかにすることがまず必要となる。とくに、二一号遺跡は沖ノ島祭祀の変質を解明するうえで重要な位置を占めるが、その詳細が不明な点は検討を深めるうえでの障壁となっている。さらには、沖ノ島祭祀を古墳時代のなかで相対化させるには、宗像地域における古墳の築造状況や集落動態とのつきあわせが必須となる。これらの諸関係を長期的に追尾することによって、沖ノ島祭祀にたいする在地勢力と倭王権の関係をより詳細に叙述することが可能となるはずである。これらについては今後の課題としたい。

〔付記〕

本稿は二〇二一年九月一八日に「沖ノ島の鏡」と題しておこなった公開講座（『令和二年度世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群公開講座』〔於・世界遺産ガイダンス施設海の道むなかた館〕）の内容を基礎に、その後の検討をくわえて文章化したものである。本稿の執筆に至るまでの過

程で、宗像大社文化局の福嶋真貴子氏をはじめ、宗像大社のみなさま、福岡県世界遺産室の岡寺未幾氏、宗像市世界遺産課ならびに福津市教育委員会文化財課のみなさまから多大なるご協力とご配慮を頂戴した。末筆ながら記して謝意を表したい。

（島根大学）

註

(1) なお、國學院大學博物館所蔵資料に沖ノ島遺跡出土と伝わる内行花文鏡系倭鏡がある。ただし、沖ノ島出土鏡には赤色顔料の付着がみられないが（奥山二〇一〇）、國學院鏡には赤色顔料が付着したことから、これを沖ノ島出土品とは考えがたいとする指摘を妥当なものと判断する（渡辺二〇一二二）。したがって、國學院鏡は本稿の検討対象には含めない。

(2) これに該当するのは一八号遺跡の方格規矩四神鏡であるが、漢鏡ではなく同型鏡群とする見方もある（柳田二〇一一、辻田二〇一八）。その根拠についてはいくつか提示されているものの、いずれも当該鏡が漢鏡であることを否定するほどの決定的なものではないと考える。

(3) 倭鏡の時期的な評価については、筆者の三様式区分を基本としつつ（岩本二〇一七a）、前期倭鏡については下垣仁志の編年案（下垣二〇〇三a）、中期倭鏡と後期倭鏡古段階については筆者による古墳時代中期における倭鏡の変遷案（岩本二〇一七b）、後期倭鏡新段階については筆者による大別二期（細別四期）区分案（岩本二〇一八b・二〇二三a）に依拠する。なお、前期倭鏡の時期細分は、下垣案と若干の違いがあるので、注意されたい。

(4) 本稿では、辻田一九九九で示された鏡の面径分布をふまえて、二八cm以上を超大型鏡、二〇cm以上を大型鏡、一五cm以上を中型鏡、一〇cm以上を小型鏡、一〇cm未満を超小型鏡とする。

(5) 以下、古墳時代の時期区分については、前・中期を筆者の広域編年案（岩本二〇一八・二〇一二）にもとづき、I期からXI期に区分する。後期については後期前葉（北陶邑MT一五型式段階）、後期中葉（北陶邑TK一〇型式段階）、後期後葉（北陶邑TK四三型式段階）、後期末葉（北陶邑TK二〇九型式段階）と大まかに区分する。なお、前・中期の集成編年など既往の古墳編年との対応関係は岩本二〇一二掲載の対応表を参照されたい。

(6) 四号遺跡では倭鏡のほかに瑞祥文鏡片（後期隋唐式鏡）が出土しており、遺跡の形成が一時期に限定できず、複数回の「奉獻」行為の累積となる可能性が高い点には注意が必要である。この点は七号遺跡において馬具に時期幅がみとめられるとの指摘（桃崎二〇一八）や、ほかの遺物から想定される時期幅の存在にも通じる。とはいっても、七・八号遺跡から出土した馬具は後期中葉から後半を主体としており（桃崎二〇一八）、これは後期倭鏡新段階でも最新相を示す鏡が様相②の主体をなすことと時期的には整合する。

(7) なお、二一号遺跡の構築過程について、構造と軸の違いから祭壇（石組1）の構築後に別区（石組2）がつくられたとする見解が示されており（岡寺二〇二一）、その形成が一定期間におよぶ可能性を示唆する。

(8) 二〇一〇年に公表した三角縁神獸鏡地名表では、終焉段階鏡群の総数は三六面であった（e.g. 岩本二〇一二〇c）。その後、個人蔵ではあるが二四三鏡の「同范鏡」を一面あらたに確認したため（岩本二〇一二二b）、本稿執筆時点の

二〇一二三年一月現在は総数三七面となつてている。なお、以下で三角縁神獸鏡にたいして○○鏡と表記する際には、三角縁神獸鏡目録の目録番号を使用する（e.g. 岩本二〇一二〇b）。

(9) 本稿では岩本二〇一二〇aでの検討結果にもとづき、「伝世」を古墳編年上で三時期以上のずれをもつもの、「長期保有」を二時期のずれのものとする（e.g. 森下一九九八）。

(10) 年輪年代はその材の伐採年代であり、上限年代を示すものにすぎない点をふまえた曆年代論が展開される必要がある。

(11) 金首加耶の時期区分は申二〇〇〇にしたがう。

(12) ここでの議論の趣旨は、勝浦峯ノ畠古墳と二一号遺跡の関係性を排除することにあるのではなく、現状で明らかとなつてている資料からは両者の関係を積極的に評価しがたいという点にある。たしかに、中期後葉新相（XI期）における勝浦峯ノ畠古墳にはじまる勝浦系列の首長墓の勃興の背景には沖ノ島祭祀との関与が想定されてしかるべきであろう。ただし、それはあくまでも状況証拠にすぎないと考える。

(13) 宗像地域の首長墓には複数の系列があるが、系列をこえた同族集団が存在したとの理解がある（小嶋二〇一七・二〇一八、池ノ上二〇一八など）。この理解と本稿で指摘した首長墓系譜の変動は相反するものではなく、変動は集団内での構造変化を反映したものと考えられよう。

(14) なお、先行する祭祀を踏襲するような対応があつたとすれば、その際に器物の二次的な移動が生じた可能性を考慮しておく必要がある。同じ場所で「奉獻」行為が繰り返された可能性と、古い器物を二次的に移動させてリアルタ

イムに持ち込んだ器物と一括して「奉獻」した可能性は同程度とまではいかないが生じうるであろう。これについては、遺物の時期と時期ごとの出土量

を検討すれば、明らかにしうる部分もあると考える。

池ノ上宏 二〇一八「胸形君の古墳と新原・奴山古墳群」『月刊考古学ジャーナル』No.七〇七 ニューサイエンス社 一九一三頁

(15) 新山古墳の場合は、いわゆる直弧文鏡が内行花文鏡系に相当するであろう。

(16) 内行花文鏡には中・大型鏡でも文様不鮮明な例がみとめられる点が、ほかの鏡式とは異なる。なお、古墳副葬鏡のなかでも内行花文鏡は全体に占める出土総数が多く、三角縁神獸鏡以外の鏡としても量的副葬例が散見されることがから、その保有に特別な意味が込められていたと考える。内行花文鏡に文様不鮮明鏡が目立つのも同様の脈絡で説明しうる余地がある。なお、内行花文鏡に文様不鮮明鏡が多いのは、鏡式の問題もあるが小型鏡が多い点も少なからず関係する可能性がある。

(17) 一六号遺跡で最小の鏡は厳密には素文鏡系(径二・八~三・〇cm)であるが、この鏡はほかの三面の鏡とは異なつて非副葬傾向を示す鏡である。したがって、古墳副葬鏡にみる文様不鮮明鏡の傾向の対象とはしがたいので、除外して検討する。

(18) たとえば、広瀬和雄は壱岐島での古墳の築造状況を中・北部九州の政治的一体性を考慮して、後期後半における対新羅を中心とした倭の外交政策を反映した動向と評価する(広瀬二〇一〇)。この見方を大型前方後円墳の築造状況にみる共通性を重視して敷衍すれば、宗像地域の在地勢力を同様の脈絡で評価することは可能であろう。

引用文献

池ノ上宏 二〇一八「胸形君の古墳と新原・奴山古墳群」『月刊考古学ジャーナル』No.七〇七 ニューサイエンス社 一九一三頁
池ノ上宏・岸本 圭 二〇一一「1・勝浦峯ノ烟古墳について」『津屋崎古墳群II 勝浦峯ノ烟古墳』福津市文化財調査報告書第四集 福津市教育委員会 八六一八九頁

池ノ上宏・花田勝広 二〇〇〇「筑紫・宮地嶽古墳の再検討」『考古学雑誌』第八五卷第一号 日本考古学会 一九一五六頁
諫早直人 二〇〇八「日韓出土馬具の製作年代」「日韓交流の考古学」嶺南考古学会・九州考古学会第八回合同考古学会 嶺南考古学会・九州考古学会 一七五一九一頁

岩本 崇 二〇一六「古墳時代前期曆年代と副葬品様式の試論」『前期古墳編年を再考するIII—地域の画期と社会変動—』中国四国前方後円墳研究会第一九回研究集会 中国四国前方後円墳研究会 四九一六〇頁

岩本 崇 二〇一七a「古墳時代倭鏡様式論」『日本考古学』第四三号 日本考古学協会 五九一七八頁

岩本 崇 二〇一七b「古墳時代中期における鏡の変遷—倭鏡を中心として—」『中期古墳研究の現状と課題I(広域編年と地域編年の齟齬)』中国四国前方後円墳研究会第二〇回研究集会 中国四国前方後円墳研究会 九一二〇頁

岩本 崇 二〇一八「旋回式獸像鏡系倭鏡の編年と生産の画期」「古天神古墳の研究」島根大学法文学部考古学研究室調査報告第一七冊 島根大学法文学部考古学研究室・古天神古墳研究会 七三一九〇頁

- 岩本 崇 二〇二一〇a 「三角縁神獸鏡と古墳時代の社会」 六一書房
- 岩本 崇 二〇二一〇b 「附編1 三角縁神獸鏡目録」『三角縁神獸鏡と古墳時代の社会』六一書房 四八七一四九二二頁
- 岩本 崇 二〇二一〇c 「附編2 三角縁神獸鏡地名表」『三角縁神獸鏡と古墳時代の社会』六一書房 四九三一五〇二二頁
- 岩本 崇 二〇二二一 「福岡県勝浦峯ノ畠古墳出土鏡群の再検討」『社会文化論集』第一七号 島根大学法文学部社会文化学科 四三一五七頁
- 岩本 崇 二〇二二二 「中期古墳年代論—相対編年と曆年代—」『中期古墳研究の現状と課題VI—新編年で読み解く地域の画期と社会変動—』中国四国前方後円墳研究会第二五回研究集会 中国四国前方後円墳研究会 一一一九頁
- 岩本 崇 二〇二二三a 「乳脚文鏡の評価」『豊橋市寺西一号墳の研究(2) 論考編』愛知大学総合郷土研究所 五〇一五八頁
- 岩本 崇 二〇二二三b 「仿製」三角縁神獸鏡の新例と「同範鏡」『島根大学法文学部紀要 社会文化論集』第一九号 島根大学法文学部社会文化学科 六七一七二頁
- 大賀克彦 二〇二二「凡例 古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書V 清水町教育委員会 一一一〇頁
- 岡崎 敬 一九七九a 「第1節 鏡」『宗像沖ノ島』I 本文 宗像神社復興期成会 三〇三一三二七頁
- 岡崎 敬 一九七九b 「第1章 宗像地域の展開と宗像大神」『宗像沖ノ島』I 本文 宗像神社復興期成会 四五二一四八〇頁
- 岡寺未幾 二〇二二 「沖ノ島二二号遺跡についての再検討(予察) —記録写真の分
- 岩本 崇 二〇二一〇a 『三角縁神獸鏡と古墳時代の社会』六一書房
用協議会 五九一七八頁
- 奥山誠義 二〇一〇「6. 沖ノ島出土青銅鏡の朱の蛍光X線分析」『考古資料における三次元デジタルアーカイブの活用と展開』平成一八年度(平成二二年度科学研究費補助金基盤研究(A)(課題番号18202025)研究成果報告書 奈良県立橿原考古学研究所 五三一五五頁
- 小田富士雄 一九七九「第4章 沖ノ島祭祀遺跡の時代とその祭祀形態」『宗像沖ノ島』I 本文 宗像神社復興期成会 二五四一六六頁
- 小田富士雄 二〇一二「沖ノ島祭祀の再検討2」『宗像・沖ノ島と関連遺産群』研究報告II—1 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議 一一四一頁
- 川西宏幸 二〇〇四 「同型鏡とワカタケル—古墳時代国家論の再構築—」同成社
- 小嶋 篤 二〇一七「第1章 歴史をつなぐ海原」『特別展 宗像・沖ノ島と大和朝廷』九州国立博物館 一一一四〇頁
- 小嶋 篤 二〇一八「前方後円墳の終焉」から見た胸肩君」『沖ノ島研究』第四号
- 神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会 一九一三九頁
- 小林行雄 一九五五「古墳の発生の歴史的意義」『史林』第三八卷第一号 史学研究会一一二〇頁
- 佐田 茂 一九八八「四 沖ノ島祭祀の変遷」『古代を考える 沖ノ島と古代祭祀』吉川弘文館 七三一一二九頁
- 申 敬澈 二〇〇〇「金官加耶の土器編年—洛東江下流域前期陶質土器の編年—」『加耶考古学論叢』三 駕洛國史蹟開發研究院 五一四六頁
- 重住真貴子・水野敏典・森下章司 二〇一〇「3. 沖ノ島出土鏡の再検討」『考古

資料における三次元デジタルアーカイブの活用と展開』平成一八年度～平成二二

年度科学研究費補助金基盤研究（A）（課題番号 18202025）研究成果報告書 奈

良県立樺原考古学研究所 一六一三八頁

重藤輝行 二〇一一「宗像地域における古墳時代首長の対外交渉と沖ノ島祭祀」『宗像・沖ノ島と関連遺産群』研究報告Ⅰ』「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議

七一一一〇四頁

重藤輝行 二〇一八「宗像氏と宗像の古墳群」『世界のなかの沖ノ島』季刊考古学・別冊二七 雄山閣 二三一八頁

別冊二七 雄山閣 二三一八頁

篠原祐一 二〇一一「五世紀における石製祭具と沖ノ島の石材」『宗像・沖ノ島と関連遺産群』研究報告Ⅰ』「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議 三

二九一三六七頁

下垣仁志 二〇〇〇三a 「古墳時代倭製鏡の編年」『古文化談叢』第四九集 九州古文化研究会 一九一五〇頁

下垣仁志 二〇〇三b 「古墳時代前期倭製鏡の流通」『古文化談叢』第五〇集（上）九州古文化研究会 七一三五頁

下垣仁志 二〇一三「鏡の保有と「首長墓系譜」」『立命館大学考古学論集VI』和田晴吾先生定年退職記念論集 立命館大学考古学論集刊行会 一八九一一〇一頁

下垣仁志 二〇一六『日本列島出土鏡集成』同成社

下垣仁志 二〇一八「沖ノ島の鏡」『世界のなかの沖ノ島』季刊考古学・別冊二七

雄山閣 三三一三九頁

下垣仁志 二〇一二「鏡の古墳時代」歴史ライブラリー五四七 吉川弘文館

白石太一郎 二〇一一「ヤマト王權と沖ノ島祭祀」『宗像・沖ノ島と関連遺産群』

研究報告Ⅰ』「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議 一七三一一九五

頁

清喜裕一 二〇一八「沖ノ島の滑石製品」『世界のなかの沖ノ島』季刊考古学・別冊二七 雄山閣 四四一四九頁

沈載龍（村松洋介〔訳〕）二〇一三「金海市大成洞八八号墳と九一号墳の性格」『日韓交渉の考古学—古墳時代』第一回共同研究会 「日韓交渉の考古学—古墳時代」研究会 一五四一一七〇頁

沈載龍 二〇一六「金官加耶の外来系威勢品受容と意味」『嶺南考古学』第七四号 嶺南考古学会 五六一八七頁（肥田翔子・柳本照男〔訳〕）二〇一〇「金官加耶の外来系威信財の受容と意味」『古文化談叢』第八四集 九州古文化研究会 九九一一三一頁

辻田淳一郎 一九九九「古墳時代前期倣製鏡の多様化とその指向性—製作工程の視点から—」『九州考古学』七四号 九州考古学会 一一一七頁

辻田淳一郎 二〇〇七「鏡と初期ヤマト政權」すいれん舎

辻田淳一郎 二〇一二「九州出土の中中国鏡と対外交渉—同型鏡群を中心にして—」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』第一回九州前方後円墳研究会発表要旨・資料集 九州前方後円墳研究会 七五一八八頁

辻田淳一郎 二〇一八「同型鏡と倭の五王の時代」同成社

辻田淳一郎 二〇一九『鏡の古代史』角川選書六三〇 角川書店

豊元国 一九三九「官幣大社宗像神社沖津宮境内御金蔵発見の鏡鑑に就いて」『考古学』第二〇卷第二号 考古学会 八四一九四頁

仁木聰 二〇一九「継体・欽明朝における出雲の画期」『国家形成期の首長權と

地域社会構造』島根県古代文化センター研究論集第二二集 島根県古代文化セン

タ一 三〇五—三三四頁

花田勝広 一九九九「沖ノ島祭祀と在地首長の動向」『古代学研究』第一四八号

古代学研究会 一一二三頁

花田勝広 二〇一二「1. 宗像地域の古墳群と沖ノ島祭祀の変遷」『沖ノ島祭祀と

九州諸勢力の対外交渉』第一五回九州前方後円墳研究会発表要旨・資料集 九州

前方後円墳研究会 一一七四頁

土生田純之 二〇一二「8. 墳丘の特徴と評価」『馬越長火塚古墳』 豊橋市埋蔵文

化財調査報告書第二二〇集 豊橋市教育委員会 三三九—三四一頁

原田大六 一九六一-a「第二章 十七号遺跡」『続沖ノ島 宗像神社沖津宮祭祀遺跡』

宗像神社復興期成会 七一一四七頁

原田大六 一九六一-b「第三章 十八号遺跡」『続沖ノ島 宗像神社沖津宮祭祀遺跡』

宗像神社復興期成会 一四九一—六八頁

廣瀬和雄 二〇一〇「壱岐島の後・終末期古墳の歴史的意義 6・7世紀の外交と

国境」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一五八集 国立歴史民俗博物館 一〇

七一一四〇頁

松木武彦 二〇二二「1章 山陰・瀬戸内・土佐」『シリーズ地域の古代日本 出雲・

吉備・伊予』角川選書六五九 株式会社KADOKAWA 一九一五二頁

松本 肇 一九七九「4. 小結」『宗像沖ノ島』I 本文 宗像神社復興期成会 二
三四一—三五頁

水野敏典・山田隆文・奥山誠義（編）二〇一〇『考古資料における三次元デジタル
アーカイブの活用と展開』平成一八年度（平成二二年度）科学的研究費補助金基盤研

究（A）（課題番号18202025）研究成果報告書 奈良県立橿原考古学研究所

桃崎祐輔 二〇一八「沖ノ島の馬具」『世界のなかの沖ノ島』季刊考古学・別冊二

七 雄山閣 五五—六〇頁

森下章司 一九九八「鏡の伝世」『史林』第八一卷第四号 史学研究会 一一三四

頁

森下章司 二〇〇五「前期古墳副葬品の組合せ」『考古学雑誌』第八九卷第一号

日本考古学会 一一三一頁

森下章司 二〇一二「鏡の伝世と集団」『考古学研究』第六九卷第一号 考古学研

究会 一六一一七頁

柳田康雄 二〇一一「沖ノ島出土銅矛と青銅器祭祀」『宗像・沖ノ島と関連遺産群

調査報告書I』「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議 三六九—三九

六頁

渡辺夏海 二〇一二「館藏七弧内行花文鏡をめぐる諸問題——岡山県鶴山丸山古墳出

土鏡との比較を通して——」『國學院大學博物館研究報告』第三八輯 國學院大學

博物館 二三一—三二頁

※古墳や遺跡にかかる一次文献については、紙幅の関係から割愛した。

図表出典

図1 水野・山田・奥山（編）二〇一〇を引用。

図2 原田一九六一-aおよび水野・山田・奥山（編）二〇一〇を引用。

図3 1・2・4～6・水野・山田・奥山（編）二〇一〇を引用、3・豊一九三九
を引用。

図4 水野・山田・奥山（編）110-1〇を引用。

図5 水野・山田・奥山（編）110-1〇を引用。

図6 水野・山田・奥山（編）110-1〇を引用。

図7 1-3・5・6・宗像市蔵、4・宗像大社蔵、7・福津市教育委員会蔵。

図8 重藤二〇一八を引用。

図9 1・水野・山田・奥山（編）110-1〇を引用、2・福津市教育委員会蔵。

図10 1・2・水野・山田・奥山（編）110-1〇を引用、3：https://www.britishmuseum.org/collection/object/A_1965-0223-1（最終確認日：110-11-1年1月12日）を引用。

図11 九州歴史資料館蔵。

図12 1-4・奈良国立博物館蔵、5・東京国立博物館蔵、6・京都府埋蔵文化財調査研究センター蔵、7・朝来市教育委員会蔵、8・相原市教育委員会蔵、9・南丹市立文化博物館蔵。

図13 宗像大社蔵。

表1-3 岩本作成。

